

書評

## 軍記物語と〈教育〉

### ——高木 信『死の美学化』に抗する 『平家物語』の語り方——

榊原 千鶴

本書は、『平家物語・想像する語り』（森話社、二〇〇一年）、『平家物語・装置としての古典』（春風社、二〇〇八年）に続く、著者三冊目の単著である。『平家物語・装置としての古典』「おわりに」には、『平家物語』と〈教育〉に関する本の公開に言及した一節がある。わずか一年の間に、それが本書として現実のものとなった背景には、著者の精力的な活動があることは言うまでもない。同時に両書は、『平家物語』をはじめとする軍記物語と〈教育〉との多重化するかかわりを、『平家物語』の分析を通して考えるという問題意識によりつながる。十五年にわたって高校の教壇にあつた著者にとつての、ある種の使命感を評者はそこに想像する。

本書で著者が言う〈教育〉とは、教室という空間で行われる学校教育だけをさすものではない。『平家物語』がもつ〈教育〉機能、読者にある種の読みを強要する、常

識の形成の意をも含むものである。著者はそれを以下の三つに分ける。

- 1、『平家物語』が実際の教育現場で教えられているというかわり方。
- 2、学校教育に限らず、『平家物語』が〈教育〉するという側面。
- 3、享受過程における『平家物語』の〈教育〉機能と

常識の生成という局面。

なかでも1は、「学校教育でおこなわれる〈教育〉への異議申し立てとして、あるいは従来の道徳的解釈を相対化するため」（P.15）という本書執筆の最大の目的に関わる。常識の創出が、そこに限定されるものではないにせよ、多くは学校教育の場で学習主体に強要されるものであることを思えば、1と2も密接につながる。さらに〈教育〉を経て、疑うことなく常識を内面化し、その解釈の範囲内で他者への教育を試みてしまう場合を

も視野に入れる段階として3がある。

考察にあたって三つの面が周到に想定されている。なかでも1を問うことの重要性が、著者をして本書執筆に駆り立てたのではなかったか。軍記物語を研究対象とし、中・高等学校の教壇に立つという著者と同じ経験をした者として、そんな想像をしてみる。軍記物語が教室に持ち込まれること、そしてそれを「教える」こと。そのとき感じた戸惑いと畏れ。なぜなら軍記物語は、それを「学ぶ」ことによってもたらされる「常識」が、無意識のうちに死を美化し、学習主体もそれを内面化してしまう危険性を常にはらむものだからである。

教室で『平家物語』を読むことの(不)可能性を論じた本書第3章「知盛〈神話〉解体——教室で『平家物語』を読むことの(不)可能性」での、「自害の美学化を疑問に思うこと、『平家物語』が描く時代相と現代の違い(死をめぐる価値観の相違)を押さえること、とりわけ自害の美化は軍記物語が生み出したのかもしれないという反省を教室に持ち込むことが重要」(P.66～67)との指摘を改めて思うべきだろう。「見るべき程のことは見つ」というひと言をもって、知盛を「運命の人」として美化し、〈感動〉を喚起してきた知盛〈神話〉が、石母

田正『平家物語』や木下順二『子午線の祀り』により発見し続けられてきたものであること。そして二一世紀の今日にあっても、こうした知盛の〈美学化〉が普遍的事実として、たとえば指導書でもいまだ「常識」とされている現状を著者は問う。果たしてその〈読み〉は、テキストの分析を通して必然的に導かれるものなのか。著者が論じ、至ったところは本書で確認いただくとして、この〈読み〉もふくめ、著者がその必要性を主張し続けているのが〈理論〉である。

教室というシステムの多くが、「その〈読み〉の妥当性を討議する場も方法も与えられず、〈読み〉を他者に伝達する技術も教えられない」(P.54～55)ものであることへの憤り。だからこそ、テキスト享受者間でのコミュニケーションを行う場合に不可欠なコードとしての〈理論〉の導入と、その前提となる〈理論〉の共有が急務であることを、著者は強く主張するのである。

では、〈理論〉の共有とその教室への導入は、何をもたらすのか。

〈理論〉的読みを学ぶとは、伝達不可能性を引き受けながら伝達可能性を追い求めることであり、自己の感性を問い直し、社会的に定着している「常識」という枠組みに違和を感じるためのアイテムとする

ことであり、自分の感じた違和を表出するための手段である。(P.55)

自己や文学を絶対化しない方途としての〈理論〉。それは、伝える努力をし続ける存在としての、教える者と学ぶ者に、等しくコミュニケーションの機会を与えるものとも言えよう。文学的テクストを〈学ぶ〉上での段階として、著者が挙げるのは次の三段階である。

第〇次学習：日本語を習得する、文脈によって単語の意味を選び取る、場面や対人関係によって使用される語彙や態度の違いを知る、日常的コミュニケーションのなかで人の感情を読みとることなど。

第一次学習：文学テクストを〈構造的に読む〉ことを学ぶレベル。話型や語る主体の位置、話素の組み合わせといった物語を読むための基本的なアイテムを手に入れ、表層的構造分析が可能な段階。

第二次学習：脱構築や精神分析経由の主体の成立と分裂、語る主体の抑圧性や物語行為と物語表現と物語内容の齟齬といった〈構造的読み〉を相対化する段階。

第二次学習に至って初めて、「テクストを一貫したもの、

了解可能なものとして理解することへの疑念」(P.46)が生まれる。それこそが、第一学習の〈構造的読み〉によって抽出されるような要素を「常識」として内面化している自身のありかたに、疑義を抱く一瞬を可能としよう。同時にそれはテクストへの科学的アプローチと言える。

とはいえ著者も指摘するとおり、第一次学習さえ定着していない教室内の現実がある。そこにある理由を、ひとつひとつ挙げていくことは容易だろう。同時に、第二次学習こそ必要であるとする著者の提言を、現実的ではない理想論と退けることもまた、可能だろう。だからこそ著者はここで、マンガ版『NANA』や歌詞(「22才の別れ」)を例に、現場での〈理論〉導人の実践を記す。(〈理論〉を教えるなんて、現実の教室では所詮絵に描いた餅、と諦めを口にする前に、まだまだやれること、トライする方法があるじゃないか。そういう現場に立つものとしての気概を、ここに感じるのは評者だけだろうか。

たとえば本書第一章「教育／権力／物語——もう一つの〈源／平〉合戦」が、従来の軍記物語研究書とは異なり、u.a.の歌う「HORIZON」から始まることを、著者独自のスタイルと片付けるにとどまるとしたら、それは

あたらない。著者が、言葉とは「嘘をつくものである、差延化であり、到達不可能なものであり、記号字体を破砕するもの」(P. 62)と定義し、〈理論〉的思考の導入なしに、そうした「言葉の力」を育てることなどできるはずはない、と主張するとき、著者にとっての何が目的であり、何が手段であるかは明らかである。「どう学ぶか」、それ以前に、問われているのは「どう教えるか」である。

「文学作品」を読まなくても、歌詞に涙する若者はいる。情感を学ぶ文化装置を、「文学作品」に限る必要などない。洗練された歌詞をもって「ブンガク」する者たちは多い。そうした意味で、補章「マンガでよむ『平家物語』の世界」増殖する『平家物語』、あるいは物語へのとば口」にまとめられた膨大な調査結果は、著者ならではの労作であり、貴重なデータベースである。作業の大変さと思うだけで、評者などは軽い目眩を覚える詳細さであり、ここにもまた、長く中高生の身近にあった著者の教師としての一面を見る。

だが、いわゆる「日本文学研究者」にとつての基礎作業とされるもの、一般へのテキストの提供、注釈、現代語訳、解説、などに関して、「〈現代〉」に対するコミットはない」(P. 38)とする見方には、評者は待ったを掛けたい。著者が強調するのは、テキストを社会に送り出す

に際して、「日本文学研究者」にとつて発信するに足る〈思想〉を鍛える場の、あまりにも少なかったことである。そうした苛立ちを理解した上で、あえて、基礎作業を通して、あるいは、思考を繰り返し検証を続ける者たちのなかにも、〈現代〉を見据えた思想的営為は存在すると評者は考える。

多くの日本文学研究者は〈废墟〉を前にしたロマンティズムと、この〈废墟〉が時代の揺り戻しにより新たな帝国として新生するにちがいないという無根拠な妄想を持っているのではないか。(P. 38)

たしかに、一面の真実だろう。あるいは、日本文学研究の復興が現実のものとなったとき、多分にナシヨナリズムとの結託を強めているだろう、との推測にも同意する。だが、「いま・ここ」で、軍記物語に関わること、それを教室という場に持ち込むこと。まさに、軍記物語と教育という接点で、思想の必要性を常に喚起させるものがあることを言えば、そこに期待を残しても良いのではないか。そして同時に、解体させたその先に、何を目指すのか。「ロマンティズム」でもなく「無根拠な幻想」でもない何かを、自身の思想として鍛える必要を思う。

ところで、第5章「貞女」の檻——〈知〉にダブル

バインドされた小宰相」に以下の指摘を見る。

空虚な理念Ⅱ。常識としての、あるいは〈知〉として流布していた「貞女観」が実際に人々を拘束し、意識的な教育効果を持ち、寡婦たちを死に追い立てたわけではないのだ。〈貞女〉の幻影を求める欲望だけが深く広く浸透していったのだろう。(P.132)

果たしてこう言い切れるだろうか。たしかに著者は、主として覚一本をもって丹念に小宰相のありかたを追い、そこに、〈死の悲劇の物語〉を〈美学化〉することへの抵抗を読み取ってもいる。そして、そうした覚一本や百二十句のありかたについて、「貞女の物語」群に絡めとられていくしかない女性たちが、〈貞女〉と名付けられる必要がなくなる日があるということの担保になりうる」(P.155)とも評価する。

だが、そうした覚一本や百二十句本が、諸本中、教育と関わる機会を多く持ったにもかかわらず、それでもなお、〈貞女〉の美德を教えるものとして利用されてきたこともまた事実である。近代に至ってもなお、死に向かう女性たちの背後に、軍記物語はたしかにあった。もちろんどこまでを視野に入れるかという論の前提となる時代区分の問題もある。著者もその点への目配りは行っているだろう。ただ、昭和初期、そして今もまた、〈戦前

であるとの著者の認識を援用するならば、徴兵制と学制が布かれ、日本が近代国家としての歩みを始めた明治初期もまた、〈戦前〉であることには変わりはない。そのとき、女性教育における〈知〉の継承のひとつとして、軍記物語を介した〈貞女〉の復活も現実としてあった。その教化と強化についても、発言を求めたいところである。

さらに女性教育に関連することとして、第7章「建礼門院の庭——『源氏物語』を読む〈女〉」での、『源氏物語』が本来有していた仏教に回収されない〈物語〉のエロティシズムが、中世の、たとえば紫式部墮地獄説Ⅱ観音説にはもはや見られないという指摘に関しても、〈色好み〉と女性教育とのかかわりによって、さらなる論の展開が可能ではなかったか。いずれも、著者のなかでは自明のことであろうが、あえてないものねだりをした次第である。

著者は「あとがき」で、『平家物語・想像する語り』『平家物語・装置としての古典』そして本書を、自身にとつての三部作、二十年の成果であり、研究人生の「青春」の記念と位置づけている。そこにあるだろう感慨の幾分かは、著者とほぼ同じ時に研究を始め、大学院でともに机を並べた評者にも理解しうるものである。あれは竹内

まりやの「厭」だったろうか、歌詞を介して（読み）を語ったかつてを懐かしく思い出す。問題意識も手法も、常に模索の中にあつた評者にとつて、舌鋒鋭く早熟だった著者との出会いは、常に刺激に満ちていた。多くを教えてもらい、多くを学び、ときに励まされた。とはいえお互い、落ち着くにはまだまだ早すぎる。

著者は二〇〇八年三月に東海高校を退職し、四月より相模女子大学学芸学部日本語日本文学科の教員となつた。新しい環境のもとでの、さらなる刺激的な活躍が楽しみである。

最後に、評者の力不足により、本書の一部しか取り上げるのができなかったことをお詫びし、本書の構成を記して筆をおくにする。

「死の美学化」に抗する

—「平家物語」の語り方／目次

凡例

はじめに

第1章 教育／権力／物語 —もう一つの〈源／平〉合

戦

第2章 「教えるのか」／「どう学ぶのか？」という問

題構制 —〈理論〉が拓く地平

第3章 知盛（神話）解体 —教室で『平家物語』を読

むことの（不）可能性

第4章 〈父—息子〉の『平家物語』—アンチ・ヒーロー

としての宗盛の可能性

第5章 〈貞女〉の檻 —〈知〉にダブルバインドされた

小宰相

第6章 熊谷直実の〈まなざし〉—死者の魂を分有する

第7章 建礼門院の庭 —『源氏物語』を読む〈女〉

補章 マンガでよむ『平家物語』的世界

—増殖する『平家物語』、あるいは物語へのと

ば口

初出一覧

あとがき

軍記物語章段名索引

軍記物語以外の本文一覧と索引

研究者人名索引

キーワード索引

二〇〇九年三月三十一日、青弓社、四六判、二六〇頁、

二、八〇〇円＋税

（さかきばら・ちづる／名古屋大学）